

たけのこ幼稚園とラジオのおつちゃん(9)

しょうごもり
庄籠

道子

おつちゃん、連行されるの巻

たけのこ小学校の運動会が終わったからといって油断してはいけません。今度はたけのこ保育所の運動会がある。たけのこ幼稚園の子どもたちは、みんなたけのこ保育所の卒業生なので、みんな招待される。大きな顔をして行けばいいのである。

その日は土曜日で、幼稚園はお休み。幼稚園の子どもたちは、おうちの人に連れられて、大きな顔で保育所へやってきた。

小学校の運動会では、一生懸命走っても「かわいいねー」と言われるばかりだったが、保育所では違う。幼稚園の子が全力で走ると、保育所の子たちが「うわー!」「はーい!」「かっこいい!」と、憧れと尊敬のまなざしで見ると、保育所の先生たちや他の大人たちも「大きくなったな」「早ようになったな」「さすが幼稚園やねー」と言ってくれる。ははは。ざまあみるだ。三人組もすっかり上機嫌で、保育所からもらったジュース

を飲んでいた。

もちろん、たけのこ保育所の運動会にもラジオのおっちゃんは参加する。毎年恒例のことだ。ちゃんとおっちゃんの分のジュースも用意してある。

その日もおっちゃんは「あー！」と大きな声を出して、小さな子をどかせた後、保育所の庭を走っていた。

その時、招待客の中のおまわりさんが立ち上がったのにりょうたが気づいた。招待客の中に、いつもだったから、幼稚園の先生たちもいるんだけど、今年はいない。それから、おまわりさんは、いつもは、たけのこ村の駐在所のおまわりさんがいるんだけど、今年は、見たこともないひげのおまわりさんがいた。

ひげのおまわりさんは、ラジオのおっちゃんが門の方に向かうのについていった。そして、おっちゃんの腕をつかんで何か言ってる。変だ。三人組は、顔を見合わせ、あわてて走ってついていった。

保育所の門の前にひげのおまわりさんが乗ってきたバトカーが止まっていた。ひげのおまわりさんは、ラジオ

のおっちゃんの腕をつかんだまま、おっちゃんをバトカーに乗せた。おっちゃんはいやがってるみたいだ。降りようとしている。でも、ドアに鍵がかけられた。ひげのおまわりさんは運転席に座ると、バトカーを発進させた。

おっちゃんが、バトカーで連れていかれた！

三人組はぼかんとして、バトカーの後ろを見送っていた。

ラジオのおっちゃんがバトカーに無理やり乗せられたのを見たのは、三人組と、あと何人かのお母さんたちだけだった。

「ちよつと、ちよつと……」

目撃したお母さんたちは、他の人たちにうわさをひろめにいった。

翌月曜日、三人組は早く幼稚園に行った。きのうの日曜日、三人で集まって相談した。

「ラジオのおっちゃん、どこに連れていかれたんやろ？」

「どこって、おまえ、警察に決まつてるやろ」

「えーっ、おっちゃん、刑務所に入れられるんかいな。なんや。ラジオのおっちゃん、何か悪いことしたか？」

「いいや。何も。いつも通りやったで」

「そや、そや」

三人組はそれぞれの家族に尋ねてみたが、みんな「そりゃ困ったこっちゃな」。「まあ、おまえが心配せんでもええことやで」とか言うばかりで、話が先に進まない。

三人組は、また集まつて相談した。

「警察、連れていかれて、どないなるんやろ」

「なわでしばられて、ござの上に座らせられるんや」

たつやが言うと、

「えっ？ ござ？」

りようたとしなりが同時に聞いた。

「あ、ごめん、ごめん、それは時代劇や。机のある狭い

部屋に連れて行かれるんや」

「窓に鉄格子とか入つとるとこやろ」

「そや。そして、机があつて、こつちに刑事が座つて、あつちにラジオのおっちゃんや座らされるんや」

「刑事の前には紙が置いてあつてな、ほんで『名前

は？』って聞くんや」

「えーっ!? ラジオのおっちゃんって、名前、言えるっけ？」

「さあ。名前言うたん、聞いたことないわ」

「ほんま、聞いたことないわ」

「名前、言わへんかったら、どないなるん？」

「怒られるんとちゃうか？」

「机をバン！ と叩いて『こらあ、さっさとはんかー！』とかつて」

「げー」

三人組は、明日幼稚園に行つて、先生たちに相談しようということを決めた。

「さあ。名前言うたん、聞いたことないわ」

「ほんま、聞いたことないわ」

「名前、言わへんかったら、どないなるん？」

「怒られるんとちゃうか？」

「机をバン！ と叩いて『こらあ、さっさとはんかー！』とかつて」



だから、月曜日、三人組は早く幼稚園に来たのだ。

「おはよー！ あら、三人とも早いじゃないの？」

籠先生が元氣いっぱいで言った。全く。この人には悩みというものが無いんやろか。三人組はため息をついた。

ラジオのおっちゃんがパトカーに連れていかれた話をすると、籠先生は突然怒り出した。

「あんたら三人もおつて、何で止めへんやったん？ おまわりさんに、『この人は何も悪いことしていません』って何で言わへんやったん？」

そんな無茶な。相手は警察やでー。はむこうで反対に僕らが連行されたら、どないすんねん。

ちょうど、そこへ、あいこ母子がやってきた。あいこのお母さんもラジオのおっちゃんがパトカーに乗せられたのを遠くから見びびくりしたと言う。

招待されたけど、幼稚園の先生たちは、二人とも用事があって、保育所の運動会に行けなかった。そして、ど

うやら、たけのこ村の駐在所のいつものおまわりさんも、研修会か何かがあつて遠くに行つて留守だったらしい。そして、たけのこ村のむこうのどんぐり村のそのまたむこうのきのこ山の駐在所のおまわりさんが替わりに来たらしい。きのこ山の駐在所のおまわりさんは、ラジオのおっちゃんのことを知らなかつたらしい。どんぐり村の駐在さんなら良かったのに。ラジオのおっちゃんのこと、知つてるから。

あいこのお母さんも憤慨している。

「ラジオのおっちゃん、何も悪いことせえへんのに、勝手に連れていつて、ひどいわー」「ほんまですねー。何とかして助け出さなー。どないしたらええんやろー」

籠先生も竹田園長先生も腕組みをして考えている。

三人組も考えている。やつぱり牢破りしかないか。時代劇の好きなたつやが、そう言おうと口を開きかけた時、ラジオ体操の音楽が聞こえてきた。みんなが振り返った。ラジオのおっちゃんが右手を振りながら歩いている。左手で、いつものようにラジオを耳にあてている。

「おっちゃん、おはよー。警察から帰れたんやね」

あいこのおかあさんと先生たちが口々に言ったが、おっちゃんはラジオ体操の世界にいる。こちらを見ることもなく、そのまま歩いていった。いつも通りの下着のシャツ。いつも通りの作業ズボン。いつも通りのぞう

記者会見の巻

まきのお母さんは、おなかが大きかった。六月頃、

「まきちゃんのおかあさん、あかちゃん生まれるんやね。ええねえ」

と籠先生に言われて、まきはすごく怒った。

「おかあさん、あかちゃんなんか生まれへん」

「あら、だって、まきちゃんのおかあさん、おなか大きいんちゃうん？」

そう言われて、まきは血相を変えた。

り。

「よかったね」

みんなは、顔を見合わせてにっこりした。

「牢破り」をして「打ち首獄門」にならなくてよかった。たつやもほっとした。

「ちがうもん。あかちゃんでおなか大きいんやないもん。おかあさん、ごはん、食べ過ぎただけやもん」

そう言つて、まきはぼろぼろ涙をこぼした。まきは二歳年下の妹がいる。妹が生まれたとき、おかあさんをとられたような気がして、まきはつらかったのだろうか。

籠先生は黙ってしまった。「先生がまきちゃんを泣かした」とはやそうとしたけど、怒られそうな気がして、三人組は目配せしただけだった。

そのあと、まきは、毎日のように「妊婦さんごっこ」をした。

ふとんをしく。病院に電話をする。

「大変です。もうあかちゃんが生まれそうなんです」

「はい、すぐ入院してください」

スカートの中に何匹もぬいぐるみを入れていた。

「うーん、うーん。生まれそうです。うーん、うーん」

うなる。臨場感があふれている。

「あ、生まれました！」

スカートからぬいぐるみがポンポン出てくる。

「おめでとございます！」

まきは、毎日毎日妊婦さんになっていた。

いつのまにか、「まきちゃんのおかあさん、もうすぐ

あかちゃんがうまれるね」と言われても、まきは怒らなくなっていた。

それから半年。そろそろ肌寒くなっていた。まきが朝

来て、こっそり籠先生に言っているのを三人組は聞いた。

「あのね、おかあさんね、あかちゃん、生まれたの」

「やったー。おめでとー！ 男の子？ 女の子？ どっ

ち？」

「男の子」

「そう、弟だね」

話していると、まわりに子どもたちが集まってくる。

「なに？ なに？ どないしたん？」

「まきちゃんち、あかちゃん生まれたんだって。弟だっ

て」

「ふーん」

みんな興味津々だ。

「あーあ、言うてもた」

まきがとがめるように言った。えっ？ 言うたら、あかんやったん？

五日後、まきが、朝一番に籠先生に言った。

「先生、私がいいって言うまでないしょにしとつて。あかちゃんの名前、決まったの」

「なんていうの？」

「ないしょやで。『けんいちろう』。私があとで発表するから、言わんどつてね」

「わかった」

さすがにおしゃべりの籠先生もないしょにしてた。

昼前、竹田園長先生が記者会見を開いてくれた。

「今から重大発表があります。みなさん、準備はよろしいですか。それではまきちゃん、どうぞ！」

まきはすました顔でみんなの前にすすんだ。みんなが静かに聞いているか、ちゃんとこつちを見ているか、ぐるりと見渡したあと、おもむろに言った。

「あかちゃんの……」

「あかちゃん、生まれたんやんね」

誰かがよこやりを入れた。

「しっ！」

まきはにらみつけた。もう一度最初からはじめた。

「あかちゃんの名前が決まりました。『けんいちろう』です」

パーン！ クラッカーがなった。籠先生、いつのまに用意していたんだらう。

竹田園長先生がまきにマイクをむけるかつこうをして聞いた。

「おめでとうございます。で、あかちゃんは、いつ生まれたのですか」

「十一月七日です」

「あかちゃんとおかあさんは病院からかえってきましたか」

「あした、かえってきます」

「そうですか。それはおめでとうございました」

「はい」

まきは満足そうにすまして、自分のいすにかえっていった。
(保育研究グループ はるにれ)